

AJCA NEWS

NO.375 2017年 6月

発行：一般社団法人 全日本コーヒー協会

目 次

- I 全協関係の動き
- II トピックス
- III 委員会等の動き
- IV 行事のお知らせ
- V 人事異動
- VI 協会日誌

I 全協関係の動き

2017年度6月までの状況について

(コロンビア産コーヒーに検査命令)

2017年5月1日に厚生労働省は、輸出業者の異なるコロンビア産コーヒー生豆から2例連続してクロルピリホスの残留農薬基準値(0.05ppm)を超えたため、コロンビア産コーヒー豆及びその加工品に対し、検査命令の実施を各検疫所に通知しました。

2013年5月にインドネシア産コーヒーに対する検査命令解除以来の検査命令です。全日本コーヒー協会としては、検査命令解除要件のクリア要件(連続300件かつ1年間)を満たすこと、残留農薬違反が続いてコーヒーの安全性に疑問を持たれないようにすること、コロンビア産コーヒー生豆の入手が困難化しないことなどを考え、電磁的理事会により輸入通関前に自主検査を行うこととしました。また、自主検査費用について厚生労働省登録検査機関から見積もりを取り、最も低かった1検体10,800円の3分の1の3,600円を全協から支援することとしました。

クロルピリホスは、有機リン系の殺虫剤です。1965年にダウ・ケミカルが販売し、現在、世界各国で多数のメーカーにより製造されています。(聞くところでは、日本では日産化学、クミアイ化学、ダウ・ケミカル日本、サンケイ化学が農薬製剤を製造。)本農薬の特徴は、散布後は植物へ浸透移行せず(根を介して土壌からの吸い上げもないとされます。)散布されたコーヒーチェリーなどの表面に残留し、昆虫が接触や吸引することにより殺虫剤として効果を発揮すると言われていました。日本においては農薬以外でシロアリ対策剤として使用されていましたが、シックハウス対策で、建築基準法の改正により現在は使用禁止とされています。

日本ではゴルフ場で使用されているとも聞きますが、使用規制により使用場面は減少しているようです。ただ、海外では衛生害虫対策として使用されているともいわれ、乳剤や粒剤、水和剤、くん煙剤等として使用されている可能性があります。

5月17日にヴェレス FNC 総裁が横浜会長を表敬されたとき、全協は本問題について、コーヒー生産地からコーヒー保管倉庫、積出港の倉庫、コーヒーの包装材（麻袋など）などをサンプリングし、汚染原因を特定し対策を講じて欲しいと要請しました。FNC は、2015～2016年までコロンビアでエル・ニーニョの影響で、早魃が続き CBB が発生し、通常2%程度の虫食いが8%～10%の虫食いとなったため、農民が農薬を散布しすぎたことが原因だとしました。

FNC は農民の不適正な農薬使用に原因を求めますが、2015年1月にコロンビア産コーヒー生豆からクロルピリホスが 0.50ppm（神戸検疫所管内）、6月（横浜検疫所管内）には 0.09ppm 検出されています、このコーヒー生豆はエル・ニーニョの発生前のものとみられます。特に6月のものは有機コーヒー生豆です。FNC が、コーヒー生産者の不適正な農薬使用と、決めつけるだけでは原因は把握できないと考えます。

コーヒー生豆に対するクロルピリホスの残留農薬基準値は、国際コーヒー機関調べ（ICO の求めに応じ回答した国のデータ）によれば、Codex 0.050ppm（日本はこれに準拠）、米国 0.100ppm、EU 0.200ppm、ブラジル、インドネシア、エクアドル、ケニヤは 0.050ppm となっています。FNC からの連絡によればコロンビアも 0.050ppm です。

検査命令解除への道は遠く険しいですが、自主検査により何とかしないと輸入コストが高いまま継続することとなります。

（コーヒーとからだのおいしい話4）

5月に「コーヒーとからだのおいしい話4」を上梓しました。表紙は若いカップルがコーヒーを楽しむイラストにしています。内容はここ3年近い間に国立がん研や研究助成の優秀な研究成果などを盛り込んだものです。掲載内容については、顧問ドクター、研究者及び科学情報専門委員等から意見を頂戴し、医薬品医療機器等法に触れる表現のないようチェックするとともに、内容を充実させました。

「毎日、快活に過ごせる“その1杯”」とのタイトルで「血管の話」（血管の病気を減少させるコーヒー）、「長寿の話」（病気の発生を抑制するコーヒー）、「美容の話」（美しさの基礎力を育むコーヒー）と3区分に分けてコーヒーの機能について説明しています。2016年6月に国際がん研究機関が発表した「コーヒーは人に対する発がん性について分類できない」とする発表も掲載しています。

ただ、我々コーヒーの販売に携わる者はいたずらに「コーヒーはからだに良い」というだけでなく、その機能を丁寧に説明する必要があると考えます。また、美味しいコーヒーを提供することでリピーターを増やすことが重要であると考えます。

（2016年コーヒー需要動向調査結果）

2016年10月に実施した第18回調査の結果がまとまりました。一人1週間当たりの飲用杯数は11.09杯で、2014年調査11.13杯を下回りました。2016年の消費量が過去最高とするデータと矛盾するのではないかとの声が聞こえそうですが、調査を行った10月の気温が例年を上回ったためだとみています。実は2012年調査も同様の問題が出ています。2016年10月の状況について需要動向調査を担当される委員の3社にお聞きしたところ、各社とも10月調査と似た販売状況であったとのことでした。

種類別飲用状況では、インスタントコーヒーの飲用は引き続きトップですが、飲用杯数は前回調査を0.59杯減の3.95杯となりました。レギュラーコーヒーは堅調に伸び3.89杯とインスタントコーヒーに拮抗してきています。10月の気温が高かったことや利便性などからリキッドコーヒーが大幅増の1.51杯になっています。缶コーヒーは引き続き減少し1.75杯で、リキッドコーヒーに抜かれそうです。

飲用場所別では、インスタントコーヒーの減少とも関係するかもしれませんが、家庭内

飲用が前回調査を2%程度下回り6.89杯となりました。家庭に次ぐ飲用杯数の職場・学校も4%強減らし2.60杯となっています。一方、喫茶店・コーヒーショップの飲用杯数はほぼ倍増の0.37杯、レストラン・ファストフードも同様に倍増の0.21杯となっています。この調査からは外食部門でのコーヒー飲用が堅調にみえますが、暑いため喫茶店やコーヒーショップで避暑を行った人たちも多くいたのかもしれませんが。

年齢別飲用杯数は、男女ともに18～24歳の飲用杯数が増えましたが、25～39歳は男女共に飲用杯数を減らしています。60歳以上の人口のボリュームゾーンは男女共に伸びており、ここで伸びればコーヒー消費全体のボリュームが膨らむと考えています。

Ⅱ トピックス

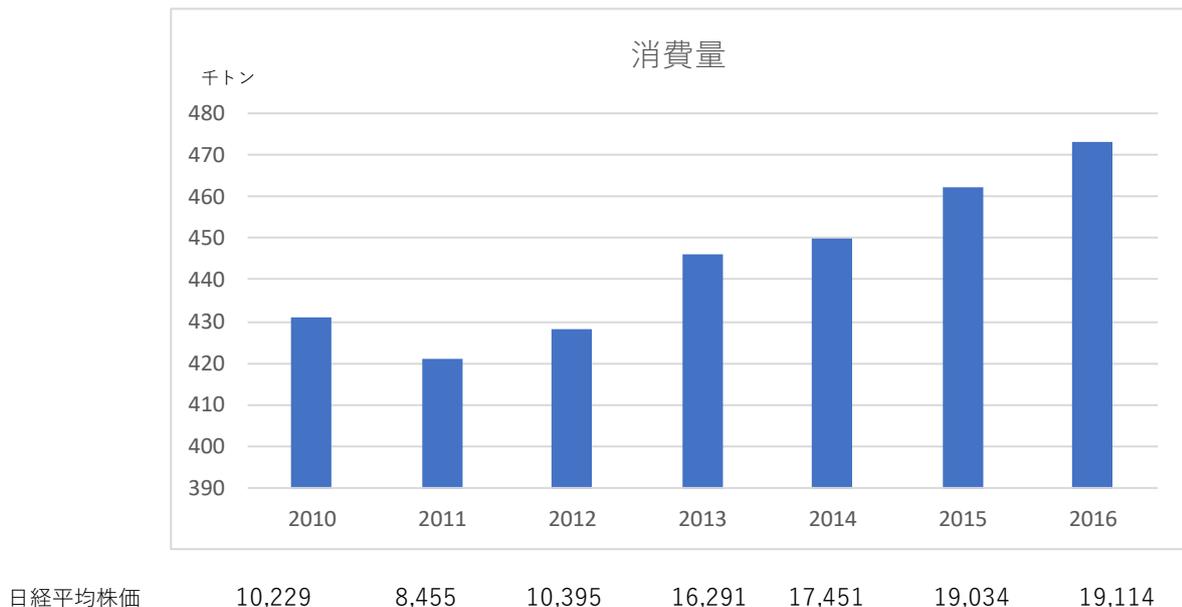
(2017年1～4月のコーヒー消費)

2017年1～4月のコーヒー消費は対前年同期比0.8%増と、ほぼ横ばいです。人口減と消費者の節約志向が続く中、コーヒー消費が減少とならないのは、それなりに健闘しているといえます。ただ、2017年の平均月間消費量は38千トン台で、2016年の月平均39千トン台と較べると余り勢いが無いのが気になります。2016年は年後半の伸びで47万トン台の消費になったので、本年も後半の伸びにより5年連続の記録更新になって欲しいと考えます。

なお、デカフェネイテッドコーヒーの輸入量は生豆及び製品共に大きく伸び、総量では倍増状況です。

(コーヒー消費と株価の関係)

全日本コーヒー協会は、コーヒー消費の伸びを何か経済データで裏付けられないか調べたところ、安倍政権誕生とその後の株高の推移とほぼ比例関係にあることがわかりました。以下にその関係を示します。



(内外の世相)

2017年も半分が過ぎようとしています。世界経済は余り明るくないというように見られていましたが、米国の株高などにみられるように意外に堅調です。政治と経済は不可分と言われ、トランプ大統領の誕生が当初世界経済を落ち込ませると報道されていましたが、逆に株高になり、米国金利が引き上げられても状況は殆ど変わらないように思えます。

そうは言っても、トランプ大統領の言動や行動が多くの人を不安にさせているのは間違いありません。知識不足か意図的かはわかりませんが、平気で虚偽的言動を發します。指摘されると大統領報道官等の取り巻きは「Alternative Facts」と釈明しますが、聞く方には全く理解できません。大統領スタッフは Debate で鍛えられた米国の教養ある人達ですから、マイケル・サンデルのように相手を理解させるよう説得すればと思います。

最近、日本では「印象操作」という言葉が目につくようになりました。米国に「Alternative Facts」があるなら、日本には「Impression Management」があるよ、ということなのでしょう。学のない筆者には理解できない時代です。

(フォトコンテスト 2017)

本年も10月1日の「国際コーヒーの日」記念イベントとして、「Life with Coffee フォトコンテスト 2017」と題し、様々な生活の中でコーヒーを楽しんで頂いているシーンを募集します。6月1日より7月31日まで2カ月間募集します。表彰式は10月1日に池袋サンシャインシティの広場で行う方向で検討しています。表彰式に合わせて一般人を対象にコーヒーの試飲も行う考えです。会員各位のご協力よろしくお願い申し上げます。

(目の不自由な方からのお願いについて)

先日、本ニュースの校正中、目と耳の不自由な方から電話がありました。第1にレギュラーコーヒーについて、豆か粉か判るように点字を入れていただきたい、第2にインスタントコーヒーの容器が詰め替えようか否か点字表記が欲しい、第3にインスタントコーヒーもレギュラーコーヒーもどのような味か点字で説明を加えて欲しい、というものでした。消費者庁に話したが要領を得ず、経済産業省に連絡したところ全日本コーヒー協会の電話番号を教えてもらったとのことでした。近年、企業はホームページでの説明が多いが、自分たちには不便なだけとの意見もありました。会員社で対応できる場所があれば、ご配慮のほどよろしくお願い申し上げます。

ASIC 論文和訳

1. 韓国女性におけるメタボリック症候群の頻度とコーヒー摂取量の関係 (I)

Association between the Prevalence of Metabolic Syndrome and the Level of Coffee Consumption among Korean Women

Keyhoon Kim et al

Plos One 11 (12) : e0167007, doi:10.1371 December 15 2016

コーヒーの消費はこの10年間で顕著に増加し続け、コーヒー飲用に関する健康効果は国を超えて広く注目されている。しかし、コーヒーの代謝疾患に及ぼす効果について本当の意見の一致はない。そこで、この研究はコーヒー摂取とメタボリック症候群リスクの関係について韓国女性を対象に検証するのを目的とした。

我々は Korean National Health and Nutrition Examination Survey (KNHANES) によって集められた公的にアクセス可能なデータを使用した。2007年から2011年までの5年連続で収集された20,435人分の個人データのうち、除外基準の適用後15,691人だけが統計分析に使われた。我々はSPSS及びSTAT統計ソフトを使い、統計分析を行った。我々はコーヒー摂取の頻度が女性のメタボリック症候群の有病率と負相関を示すことを見出した。種々の生活スタイル要因、社会経済状況、栄養プロフィールを調整した上で、コーヒー消費の多い方か

ら上位 4 分の 1 に入る人達は対照の人達に比較してメタボリック症候群に罹るオッズ比が 25% 低値であった (OR 0.75、95% 信頼区間 0.67-0.84) また、年齢と BMI を調整した HOMA-IR はコーヒー消費が増加するに従って低下することが観察された。結論として、この研究はコーヒー消費が韓国女性におけるメタボリック症候群の減少と関係する可能性を示唆した。コーヒー消費とメタボリック症候群に関する横断研究で認められた相関を明らかにする目的で、確認のための追跡研究が望まれる。

メタボリック症候群

内臓脂肪型肥満に高血糖、高血圧、脂質異常症のうち 2 つ以上の症状が一度に出ている状態をいう

BMI

Body Mass Index のこと、体格指数 体重と身長から計算する。

HOMA-IR

早朝空腹時の血中インスリン値と空腹時血糖値から算出され、インスリン抵抗性の簡便な指標として用いられる

2. コーヒー飲用と胆のうがんのリスク、前向き研究 (I)

Coffee consumption and risk of gallbladder cancer in prospective study

J National Cancer Institute (2017) 109 (3): djw237

Susanna C. Larsson et al

コーヒーを飲むと胆石の出来るリスクが減るのではという科学的根拠がある。そしてまた胆石が胆のうがん発症のリスクの増加に強い関係があるという証拠もある。そこでコーヒー飲用と胆のうがん発症率の関係を検討するために 72,680 人の 45~83 歳のスウェーデン人を対象として前向き追跡調査を行った。調査対象者は調査開始時点でがんにかかっていること、コーヒー摂取量を報告していた人である。胆のうがん発症は「スウェーデンがん登録」とリンクさせて確認した。データはコックス比例ハザード回帰モデルという方法で分析し、有意差検定には両側検定を行った。期間中 (967,377 人・年の観察)、74 例の胆のうがん患者の発症が認められた。多変量ハザード比は、一日に飲むコーヒーが 0~1 杯の人に比較して、2 杯では 0.76 (95%信頼区間 0.41~1.41)、3 杯では 0.50 (95%信頼区間 0.24~1.06)、4 杯以上では 0.41 (95%信頼区間 0.20~0.83) であった。コーヒー飲用は胆のうがんのリスク減少に関与するという結論を得られた。

脚注 スウェーデンがん登録 (Swedish Cancer Registry)

1958 年に創立され、全住民をカバーし、がん症例を登録している

3. コーヒー摂取と非アルコール性脂肪性肝疾患のリスク：システマティック・レビューとメタ解析 (I)

Coffee consumption and risk of nonalcoholic fatty liver disease: a systematic review and meta-analysis Eur J Gastroenterol Hepatol 2016

非アルコール性脂肪肝 (NAFLD) は世界的に公衆衛生学的関心が持たれている疾患である。コーヒーは NAFLD を予防する効果を持っている可能性がある。しかし、今までに報告された結果は一致しているわけではない。そこで、我々は入手できすべてのデータを使い、メタ解析を行った。この研究は二つのメタ解析から成り立っている。一番目の解析ではコーヒーを飲用している患者とコーヒーを飲用していない患者の NAFLD になるリスクを比較する観察研究を含んでいる。二番目の解析ではコーヒーを飲んでいる NAFLD 患者とコーヒーを飲んでいない NAFLD 患者で肝線維症になるリスクを比較している。355 編の論文を調べたが、我々の選択基準を満たした 5 研究を解析対象とした。結果であるが、コーヒーを飲用した患者における NAFLD のリスクはコーヒーを飲用しなかった患者の NAFLD のリスクに比較し、有意に

低かった（相対危険度 0.70、95%CI、0.60-0.85）。さらに我々はコーヒーを飲用した NAFLD 患者では飲用しなかった NAFLD 患者に比較して肝線維症のリスクが有意に低下していることを見出した、合計した相対危険度は 0.71（95% CI、0.60-0.82）。

しかし、コーヒーの摂取量についての定義が研究によって異なることが、このメタ解析の主要な欠点であることを言っておかないといけない。結論として我々の研究でコーヒーを飲む人では NAFLD のリスクが有意に低下していること、コーヒーを日頃欠かさずに飲んでいる NAFLD 患者では肝線維症のリスクが有意に減少していることが分かった。コーヒー飲用を NAFLD に対する予防的手段として考えるほうがよいかどうか、さらに研究をしていく必要がある。

システマティック・レビュー

文献をくまなく調査し、質の高い研究のデータを、出版バイアスのようなデータの偏りを限りなく除き、分析を行うことである。根拠に基づく医療（EBM）で用いるための情報の収集と吟味の部分を担う調査である。

NAFLD（非アルコール性脂肪性肝疾患）

肝細胞に脂肪が沈着して肝障害を引き起こす病態を脂肪性肝疾患と言う。脂肪滴を伴う肝細胞が 30%以上認められる場合を脂肪肝と言う。脂肪肝の頻度は年々増加している。脂肪肝は糖尿病や肥満など生活習慣病に伴って発症することが多いからである。飲酒歴はないがアルコール性肝障害に類似した脂肪性肝障害がみられる病態をまとめて NAFLD（非アルコール性脂肪性肝疾患）と呼んでいる。NAFLD は肝細胞に脂肪が沈着するのみの単純性脂肪肝と、脂肪沈着とともに炎症や線維症がおこる脂肪性肝炎に大別される。この肝臓の脂肪化に伴い炎症を起こし線維症が進行する病態は非アルコール性脂肪肝（NASH）と呼ばれ、肝硬変に至り、肝細胞癌を引き起こす可能性がある。

肝線維症

肝臓内で結合組織が増加することです。線維の量が増加すると肝臓は固くなり、やがて肝硬変になります。肝線維症では全身倦怠感が或る程度で、ほとんど特徴的な症状はありません。

4. カフェイン摂取とメニエール病：関係があるのか？（N）

Caffeine intake and Meniere's disease: Is there relationship?

目的

一般に食餌制限によってメニエール病が改善されることは知られているが、その効果は完全には明らかにされていない。本研究の目的はカフェイン摂取がメニエール病発症に関わるかどうかを検証するものである。

方法

メニエール病患者（A 群）と他の原因によるめまい症状を持つ患者（B 群）、及び/又は健常人（C 群）との間のカフェイン（コーヒー、茶、コーラ類、エネルギー飲料、チョコレートを含む飲料や食品の摂取）の消費量の比較を横断的かつ観察的にケーススタディを行った。

患者

180 名（A 群 72 名、B 群 72 名、C 群 36 名）。カフェイン摂取量を次の 4 段階に分類した：非常に少ない（0-25mg/日）、少ない（26-100mg/日）、普通（101-300mg/日）、多い（301mg/日）。非常に少ないと少ないの摂取は軽消費群、普通と多いの摂取群は高消費群と位置づけた。

結果

全群の一日平均カフェイン摂取量は 175.8mg であった。メニエール病患者の摂取量は 222mg で、メニエール病でない患者（145mg）より多かった。B 群の偏頭痛患者を除くと、この 3 群間にはカフェイン摂取量は有意に差があった（ $P=0.021$ ）。さらに A 群の中の高摂取者と他の二つの群の間には有意の差があった（ $P=0.024$ ； $OR=1.301$ ， $IC95\%(1.015; 1.668)$ ）。A 群において、症状の発症年齢はカフェイン摂取者（49.7 歳）で非摂取者（55.9 歳）より若かった。

考察

メニエール病の高いリスクを持つ人々においてはカフェイン摂取を減じることが推奨され

るべきである(例えばこの病気に苦しむ家族にとっての課題として)。

5. ヨーロッパの4集団における紅茶およびコーヒー摂取とDNAメチル化との関連に関する調査 (N)

Tea and coffee consumption in relation to DNA methylation in four European cohorts,

抄録

食品の選択や化学物質の暴露などの生活様式の要因によってDNAのメチル化や遺伝子作用に変化が起こることがある。このような生理学的活性成分を含む食品としてコーヒーと紅茶があげられる。コーヒーや紅茶はともにヒトにおいて癌の進行を抑制したり、炎症を抑えたり、エストロゲン代謝に関わって病気のリスクを調節する重要な働きがあることが示唆されてきた。これらのメカニズムはDNAメチル化に変化が関わっているであろう。血中のDNAメチル化がコーヒーや紅茶の摂取と関係があるかを解明する目的で、われわれはヨーロッパでの4集団(N=3,096名)にコーヒーや紅茶摂取とDNAメチル化に関わるゲノム研究を行った。DNAメチル化の測定には血液中の全ゲノムに存在する421,695個のCpGサイトで行った。それぞれの集団について男女それぞれ別々に、あるいは混合で分析した。分析結果の相互間の解析や地域間の分析を行った。分析の結果、女性においてDNAJC16とTTC17に位置する2つのCpGサイトは紅茶摂取と関連したメチル化が独立して進行していた。男性のコーヒーや紅茶の摂取には個々のサイトとの関連はなかった。地域別の分析結果では28地域において女性の紅茶摂取とメチル化との関連が明らかになった。これらの地域ではエストロゲン代謝や癌とのかかわりのある遺伝子が見つかった。男女混合のデータ分析や男性のみのデータの分析からはコーヒーまたは紅茶の摂取と地域との有意の関連は認められなかった。

6. コーヒー摂取による前立腺がんのリスクの低減: Moli-sani コホートと細胞モデルによる根拠 (N)

Reduction by coffee consumption of prostate cancer risk: Evidence from the Moli-sani cohort and cellular models,

抄録

前立腺がんにおけるコーヒーの影響に関するメタ分析を検証する。コーヒーの生物活性化合物であるカフェインに関して *in vitro* ではいまだ深くは研究されていない。我々の研究の目的はイタリア風コーヒー摂取が前立腺がんのリスクの及ぼす影響を集団コホート研究で評価することとカフェインが前立腺がんセルラインにおいて抗増殖能、抗転移能があるかを *in vitro* で解析することである。Moli-sani コホートにおいて50歳以上の男性6,989名について4.24±1.35年間追跡調査し、100名の前立腺がん患者を見出した。ヨーロッパのEPICの食品摂取質問表を用いて食事調査とイタリア風コーヒー摂取を調べた。2種の前立腺がんセルライン、RC3とDU145を用いて、カフェインの量を増しながら増殖と転移の動態を調べた。コーヒーの低摂取量(60.1±51.3g/日)の集団の中に新たに前立腺がん患者が見つかったが、74.0±51.7g/日の摂取集団には患者はいなかった($p < 0.05$)。多重解析によって最多量摂取者(>1日3カップ)集団では最少量摂取(1日0-2カップ)集団に比べて前立腺がんリスクが53%低かった($p = 0.02$)。カフェインを投与した2種のヒト前立腺がんセルラインの増殖や転移は有意に低減された($p < 0.05$)。結論として、イタリア風コーヒーを1日3カップより多くの摂取で前立腺がんのリスクを低減する結果が疫学的レベルで確認された。カフェインは2種の前立腺がんセルラインに抗増殖、抗転移活性を示し、コホート研究の結果を細胞学的に確認した。

7. コーヒーの摂取はアルツハイマー病やパーキンソン病のリスクを低減することができるか? (N)

Can coffee consumption lower the risk of Alzheimer's disease and

Parkinson' s disease?

抄録

現社会において高齢者人口が着々と増加しているもとで、知的活力を維持していかせる食品ファクターの探索が益々重要になってきている。主要成分であるカフェインを含むコーヒーはヒトの健康に有益であるという事実が蓄積されていくにつれ、多くの研究者から注目されてきている。適量のコーヒーを摂取することによってアルツハイマー病やパーキンソン病などの神経変性疾患のリスクを低減する可能性を多くの研究成果が示唆している。にもかかわらず、病理学的、方法論的な複合的研究の必要性からも、コーヒー摂取の課題に完全な科学研究がなされなければならない。現段階では、コーヒー愛飲者は健康に不安があると怯えることはないと思われ、安全性を公表してもよいと思われる。将来においてコーヒーを飲むことは個人の味覚嗜好性を満足させるだけでなく高齢化による知的能力の低下を減じると推奨されるであろう。

8. 老齢マウスにおいてコーヒーの消費はエネルギー産生を増加させ肝臓の mTOR レベルを低下させる (K)

抄録

目的: 世界で最も消費される飲料の1つであるコーヒーには多くの利点がある。コーヒーの老化に対する効果に関してはいくつかの研究がある。本研究の目的は、コーヒーを与えた老齢(20ヶ月齢)マウスの自発運動活性、エネルギー代謝、脂質代謝を明らかにすることである。

方法: 老齢 C57 BL/6 NCr マウスを、コーヒーを与えない対照群(n = 9)、0.1%のカフェインを含むコーヒーを与えた群(n = 9)、カフェイン抜きコーヒーを与えた群(n = 9)の3群に分ける。この条件での飼育をマウスが24ヶ月齢になるまで17週間続けた。

結果: レギュラーおよびカフェイン抜きコーヒーを与えた群では血漿遊離脂肪酸レベルは減少し、肝臓のATP含量は増加し、肝臓のmTOR (mammalian target of rapamycin:哺乳動物ラパマイシン標的タンパク質)含量もリン酸化されたmTOR (p-mTOR)含量も減少した。しかし、mTOR複合体1 (mTORC-1)が関係する経路の上流或いは下流に位置する、Akt、AMPK {アデノシンモノリン酸(AMP)活性化タンパク質キナーゼ}、p70 S6キナーゼ、ステロール調節エレメント結合タンパク質1のタンパク量にもそれらの活性にも影響はなかった。レギュラーコーヒーの消費は餌と水の摂取、自発運動活性、炭酸ガス産生量、呼吸交換率を増加させた。

結論: 老齢マウスにおけるレギュラーおよびカフェイン抜きコーヒーの消費はAktやAMPK経路とは独立に肝臓の総mTORとp-mTORレベルを減少させた。mTORC-1活性の減少は抗老化作用があることが知られているので、老齢期におけるコーヒー消費は老化を遅らせる可能性がある。さらに、高齢者によるコーヒー消費は行動のエネルギーや脂質代謝に良い効果をもたらす可能性がある。

9. コーヒーを飲むことによる脳と全身の血管系への急性影響

抄録

これまでの研究でコーヒーを飲んだ直後に虚血性脳卒中のリスクが高まることが示唆されている。実際、コーヒーを飲むとカフェインが動脈の硬度、血圧、末梢血管抵抗を急激に上昇させる。他方、動脈の硬度の上昇は脳血流(CBF)の拍動指数(PI)を上昇させ脳疾患のリスクを高めると報告されている。しかし、CBFのPIやそれと動脈の硬度との相互作用に対するコーヒーの効果については、いまだに不明である。これらの背景に反して我々は、コーヒーを飲むことで引き起こされる動脈硬度の急性上昇は脳の脈拍ストレスを増加させるという仮説を立てた。この仮説を検証するため、10名の健康な若い男性に対して、コーヒー摂取が中大脳動脈血流速度(MCAv)のPIと上腕-足首動脈間脈波伝搬速度(baPWV)に与える影響をそれぞれ脳の脈拍ストレスと動脈の硬度の指標として測定した。プラセボ(カフェイン抜きコーヒー)摂取者と比較して、コーヒー摂取者では平均動脈血圧とbaPWVは高く(P <

0.01 および $P = 0.02$ ）、MCAv の平均値と脳血管コンダクタンス指標の平均値は低下した ($P = 0.02$ および $P < 0.01$)。しかしプラセボ群とコーヒー摂取群の間で MCAv の PI には有意差はなかった。これらの結果は、コーヒー摂取が全身の循環系における動脈の硬度の上昇を引き起こすにもかかわらず、脳における急性の脈拍ストレスを起こさないことを示唆する。

10. 出産前のコーヒーおよび紅茶の摂取と出産時障害、妊娠高血圧障害への影響、 Antenatal coffee and tea consumption and the effect on birth outcome and hypertensive pregnancy disorders,

抄録：

背景と目的： コーヒーと紅茶は一般に妊娠中でも摂取されている。カフェインなどの種々の含有成分は薬理的に強い影響を与えるにもかかわらず、それらの胎児への影響は明確にはされていない。カフェインの摂取は流産や早産、胎児の成長抑制に関わるとされているが、カフェイン摂取の制限は一般的見解にはなっていない。われわれは出産前のコーヒー、紅茶およびカフェインの摂取について、出産児の体重、身長、妊娠年齢と高血圧障害への影響について研究することを目的とした。

方法： WHISTLER の出産コホートから 936 名の健康な妊婦についてコーヒーおよび紅茶の摂取の調査をした。出産前のコーヒーおよび紅茶の摂取や母子の情報について出産後の質問表によって得た。報告された摂取のデータは予想されたデータと同様であった。カフェイン摂取量はコーヒーおよび紅茶の摂取量から算出した。出産と高血圧障害の関連性の算定には回帰分析法を用いた。

結果： 喫煙と出産時年齢を調整した後で、カフェインを一日 300mg 越える摂取量の集団は一日 100mg 未満を摂取する集団より高齢出産集団との間に有意に関連が見られた (直線回帰係数=2.00、95%CI= 0.12–4.21, $p=0.03$)。紅茶摂取は妊娠時高血圧の高いリスクとの間に優位に関連があった ($OR=1.13$, 95%CI=1.04–1.23, $p=0.004$) コーヒー摂取は出産時体重や出産時身長との相関性は認められなかった。

結論： カフェインの一日 300mg を越える摂取は高齢出産者との関連があるであろう。紅茶摂取と妊娠時高血圧の高いリスクとの関連性についてはさらなる解明研究が必要である。ほとんどの出産はコーヒーや紅茶の摂取との間に有意な関連性はなかった。

報道ダイジェスト

1. コーヒー1日3杯以上で脳腫瘍抑制 国立がん研究センター

日本人でコーヒーを1日3杯以上飲む人は、脳腫瘍を発症するリスクが低いという研究成果を国立がん研究センターの研究チームがまとめた。コーヒーの成分の一部が発がん抑制に関係している可能性があるという。国内10地域に住む40~69歳の男女約10万人に、コーヒーを飲む習慣を聞き、その後約20年間にわたり経過を見たところ、157人が脳腫瘍を発症した。研究チームは、コーヒーを1日3杯以上、1~2杯、1杯未満と飲む頻度で3グループに分けて、年齢や喫煙歴などの影響を取り除き、脳腫瘍のリスクを調べた。その結果、1日3杯以上飲む人は、1杯未満の人に比べて、脳腫瘍の発症リスクが53%低かった。コーヒーに含まれるクロロゲン酸やトリゴネリンという成分には抗酸化作用などの働きがあり、発症を抑えた可能性があるという。一方、海外では1日7杯以上と過剰に飲むと逆にリスクが高まるとの報告もあり、研究チームは、予防効果が出やすい適量があるとみている。緑茶についても同様に調べたが、関連は見られなかった。同センターの澤田典絵室長は「脳腫瘍の症例そのものがあまり多くなく、科学的根拠として確立するには、さらなる研究成果の蓄積が必要」と話している。(朝日新聞(2016.11.6)、陸奥新報(12.16)、岐阜新聞(12.18)、上毛新聞(2017.1.12))

2. カフェインの真実（薬物屈指の優れたものだが・・・） マリーカーペンター

「薬物屈指の優れたものだが、強い薬の例に漏れず、重大な結果をもたらすこともあるのは何でしょう。？」 カフェインをなぞなぞにすればこうなるだろうと米国の科学ジャーナリストである著者は記す。カフェインは、コーヒー豆、茶葉、カカオ豆などの成分で、それらを原料とする様々な飲料や食品に含まれる。簡単に手に入るカフェインが「薬物？」と驚く人は多いだろう。しかし、日本でも2015年末「カフェイン中毒」によって死亡した事例が確認されている。摂取量を誤れば死を招くのだ。

本書は、カフェイン文化発祥の地であるメキシコから出発し、中国、コロンビア、米国など世界各地を巡りながら、かつては一部の限られた人たちだけの間で扱われていた「魔法の薬物」が、いかに一般に普及していったのか歴史的経緯をたどる。そしてアスリートや兵士、不眠症や鬱病などに与える影響など現代社会の幅広い分野に話題は及んでいく。カフェインの中毒性や副作用について詳細に調べた本書を読むと、コーヒーを飲むことをためらってしまいそうだ。だが、大事なのは摂り過ぎないということだろう。カフェインの感受性は人ごとに異なるため、個人差があることにも注意が必要なのだという。（日本経済新聞（2017.1.8））

3. 上手な仮眠で頭も体もスッキリ！ あなたの暮らしをアップ

“仕事や勉強を頑張ろう”と思っても、ボーっとして集中力が続かない—そんな人は、積極的に「仮眠」を取ってみてはいかがでしょうか。上手に仮眠をとることで頭も体もスッキリし、ベストの力を発揮できるようになります。今回は『^{あまはらし}脳も体も冴えわたる、1分間の仮眠法』（だいわ文庫）の著者・雨晴クリニックの坪田聡副院長に、仮眠の効果や実践法などについて聞きました。

直前にはコーヒーを

パワー・ナップの後、気持ちよく目覚めるためにお勧めしたいのが、寝る前にコーヒーなどカフェインを含む飲み物を取る「コーヒー・ナップ」です。コーヒーを飲んでからカフェインの覚醒効果が表れるまで約20～30分かかります。直前にコーヒーを飲むことで、目覚めた後、ベストな状態に戻しやすくなります。また、寝る前に目覚ましをセットしたり、“〇分で起きるぞ”と強く意識したりするなど、必要以上に眠りすぎない努力も大切です。起きた後には、「背伸びをして、大きなあくびをする」「（雨の日でも）外の光に当たる」「水で顔を洗う」なども有効。いち早く脳も体もスッキリできます。（聖教新聞（2017.1.14））

4. コーヒーのゲノム アラビカ種を解読 サントリーグループの研究所が助成

サントリーグローバルイノベーションセンターは、助成先の米カリフォルニア大学デービス校がアラビカ種のコーヒーの全ゲノム（遺伝情報）を解読したと発表した。

アラビカ種の約7万1千個の遺伝子を確認した。新しい香味を持つ品種や病気に強い品種などの開発が期待される。同センターがコーヒー飲料づくりの知識を増やすためにデービス校に資金提供したほか、研究情報の交換などを実施した。アラビカ種のゲノム解読は初めてで、詳細な研究内容を15日に米国で開かれた学会で発表した。アラビカ種はコーヒー生産量の7～8割を占める。香味が良い一方で、病気に弱く、栽培地が熱帯の高地などに限られている。すでに解読されているロブスタ種コーヒーの遺伝情報と比べ、香味や栽培上の特性などの違いの要因を特定できる可能性がある。（日経産業新聞（2017.1.18））

5. コーヒー消費量4年連続で最高

全日本コーヒー協会によると、2016年国内コーヒー消費量は前年比2.3%増の47万2535トンに達し最高だった。4年連続で最高を更新、コーヒーブームを裏付けた。同協会は消費が伸びている理由を「1杯型商品が増えたことや、コンビニエンスストアで提供する淹れ立て

コーヒーの杯数が増加している」などと分析。「国際がん研究機関がコーヒーに肝臓がんや子宮がんの抑制効果があると報告したこと」も追い風ようだ。17年も最高を更新する見通し。(日刊工業新聞(2017.3.17))

6. 歳々元気 クロロゲン酸の効能

活動の合間にティータイムがあるのは、ストレスを解消して、疲れを取るためにいい習慣だ。少し前まではコーヒーは刺激が強く、闘病中の人などの体に負担をかけると思われてきた。しかし、今はすっかり健康飲料として考えられている。中でもコーヒー豆の苦み成分であるクロロゲン酸は、強い抗酸化力を持つポリフェノールの一種で、免疫力を高めて健康によい効果をもたらすという報告がいくつも出てきている。

「コーヒーは胃に悪い」という先入観はまだ根強いが、その根拠はないらしい。クロロゲン酸は、むしろ胃酸の分泌を促進する。病気治療中の人でも、1日1~2杯程度なら構わないという。クロロゲンとカフェインのどちらも脂肪燃焼効果があるといわれるので、脂っこい食事のあとはコーヒーがお勧めだ。カフェインは眠気覚ましに使われるが、その効果は飲んでから30分後くらいに現れる。だから、昼寝の前にコーヒーを飲んでおくと、30分ほどで目が覚めたときに、効果が現れやすいという。(宇部日報、三陸新報、日本海新聞(2017.3.16))

7. 楽しく食べて病気予防 緑茶・コーヒー適量を 継続摂取で病気リスク減

ペットボトルの緑茶飲料や缶コーヒーの種類が豊富になり、緑茶やコーヒーは日本の食生活に一層定着した感じがします。緑茶のカテキンや、コーヒーのクロロゲン酸という成分は、ポリフェノールの一種。その抗酸化作用には心臓病予防の効果があるといわれます。45~74歳の日本人約8万2千人を平均13年間にわたり調査した結果に基づく報告(2013年)では、緑茶を飲まない人に比べ、1日4杯以上飲む人は、心血管疾患や脳卒中の発症リスクが20%近く低くなっていました。コーヒーでも、1日1杯以上飲む人は、飲まない人に比べ、同様なリスクの低下が見られました。さらに興味深いことに、緑茶とコーヒーを両方飲むと、脳出血の発症リスクをより低下させることも分かりました。従来の研究でも、緑茶には心臓病予防に良い効果があるのではないかと指摘されています。ただ、緑茶やコーヒーの摂取量が多い人は心血管疾患や脳卒中の発症リスクが低いことが明らかになってきただけで、どこまで摂取を増やせばリスクが減ると証明されたわけではありません。カフェイン含有量の多いコーヒーは、カフェインが交感神経を刺激して血圧上昇につながります。1日1、2杯は問題ないとされますが、多量摂取が心臓病のリスクを上げるかは結論が出ていません。私も外来診療で緑茶やコーヒーの摂取量を聞きますが、特に緑茶はもともと飲んでいる人が多く、それ以上の指導は難しいのが現状です。健康のためジュースや炭酸飲料などの甘い清涼飲料を避ける指導はしますが、緑茶やコーヒーの飲み方に明らかな結論は出ていません。適量を続けるというのが良さそうです。(静岡新聞(2017.1.4)、熊本日日新聞(1.18)、大阪日日新聞、日本海新聞(1.23)、佐賀新聞(2.20)、下野新聞(2.21)、埼玉新聞(3.15)、神戸新聞・神戸(4.15)、京都新聞(4.24)、長崎新聞(5.1))

8. チラシなど配り事故防止呼び掛け 今市署

「春の交通安全県民総ぐるみ運動」初日の6日、今市署などは日光街道(国道119号)の春日町交差点で、事故防止を呼び掛ける広報活動を行った。細波^{さいは}勝也所長や齋藤文夫市長ら約50人が参加。午前7時半から約40分間、チラシや、居眠り運転防止にちなんだコーヒーのドリップパックなどを、信号待ちのドライバーに配布した。細波署長は「全

署員を挙げて今市地区の事故ゼロを目指したい」と話した。(下野新聞 (2017. 4. 7))

9. 健康歳時記 【コーヒーの効用】

なぜか眠気が襲うこの季節は、コーヒーを飲んで気分をすっきりさせたい。コーヒーの主成分であるカフェインには脳を興奮させ、頭の働きを良くし、眠気を覚ませ、思考力や集中力を高める効果がある。また、筋肉や心臓を刺激して、疲労を回復させるため、気分がさわやかになる。まずは朝の1杯だ。また、コーヒーの苦みの成分であるクロロゲン酸には、血糖値やコレステロールのほか、がんを抑制する効果がある。がんの研究機関はコーヒーを殆ど飲まない人に比べ、ほぼ毎日に飲む人はがんにかかりにくいという研究結果を発表している。ところで最近は家庭でもドリップ式で本格的にコーヒーを楽しむ人が多いが、カスも再利用したい。乾燥させれば、脱臭・消臭剤、防虫剤などに利用できるからだ。あすは「喫茶店の日」だ。1888年のこの日東京・上野に日本初の喫茶店「可否茶館」がオープンした。(宮古毎日新聞 (2017. 4. 12))

10. パソコンやスマホを使う現代人の目には 「ルテイン」が有効！

デジタル機器に長時間接する現代人の目を守るには、天然色素の一種のルテインが有効—こんな研究結果が「女王の目の実態・アイケアライフスタイルセミナー」で報告された。昨年のある調査では、日本人が1日にパソコンやスマホ、テレビなどデジタル機器を利湯する時間は平均約5時間30分10年前と比べて1時間半も伸びた。「こうしたデジタル機器から出るブルーライトは光酸化作用によって目の網膜を痛めつけ視力低下の原因になります」(林田康隆氏) ブルーライトによる視力低下を防ぐには「抗酸化成分のルテインを継続摂取することが望ましい」(日比野佐和子氏)という。1日に必要なルテイン摂取量は10~12^{ミューグ}。ルテインを多く含むホウレンソウで約5株分だが、必要量のすべてを食物から摂取するのは大変。そこでおススメが、メニコンネクトから新発売のルクテイン入りドリップコーヒー「LUTEIN&ME」。1杯でルテイン1^{ミューグ}摂取出来る。コーヒーブレイクに目のケアもできて一石二鳥だ。(日刊ゲンダイ (2017. 4. 25))

11. コーヒー豆から残留農薬を検出 コロンビア産で厚労省

厚生労働省は1日、コロンビア産コーヒー豆から基準値を超える残留農薬が検出されたとして、食品衛生法に基づく検査命令を出した。輸入時に毎回検査が義務付けられる。問題のコーヒー豆は輸入した2社が保管しており、流通していない。厚労省によると、三井物産が2月にコロンビアから輸入した生鮮コーヒー豆を横浜検疫所がモニタリング検査し、基準値(0.05ppm)の4倍にあたる0.20ppmの殺虫剤クロルピリホスが検出された。また、丸紅が3月に輸入した豆からも0.07ppmが検出された。クロルピリホスが0.20ppm残留した豆の場合、毎日かなり大量に摂取しなければ影響はなく、健康被害は考えにくいという。コロンビア産コーヒー豆は昨年1年で7万1491^トの輸入実績がある。(岐阜新聞、産経新聞、福井新聞、山陰中央新報、山形新聞、上毛新聞、四国新聞 (2017. 5. 2))

12. 健康食事 死亡リスク2割減 がん研究センター 欧米型でも1割減

野菜や果物、大豆製品など健康に良い食品を多くとる人は、少ない人に比べて死亡するリスクが2割低くなるとする調査結果を、国立がん研究センターなどの研究チームが発表した。チームは、食事の内容を①野菜や果物、大豆製品、キノコ、サンマやサバなどの油の多い魚などを多く食べる「健康型」②肉やパン、乳製品などを多くとる「欧米型」③ご飯、味噌汁、魚、漬もの中心の「伝統型」の3パターンに分類。岩手、茨城、大阪など9府県の男女約8万人に、摂取する食品の頻度や量を記入してもらったデータを使い、参加者の食事をタイプごとに点数化した。約15年にわたって健康状態や死因などを追跡した。

その結果、「健康型」の点数が高い人は、低い人に比べ、死亡リスクが2割低かった。病気別では、循環器疾患による死亡リスクは3割、脳血管疾患では4割も低下した。また、「欧米型」の点数の高い人も、低い人に比べて死亡リスクは1割低かった。適度な量の肉類や乳製品、コーヒーなどの摂取が影響したとみられる。「伝統型」は点数と死亡リスクに関係が見られなかった。(読売新聞、朝日新聞(2017.5.25)、毎日新聞(5.26))

13. クスリと正しく付き合う方法

カフェインが含まれる飲み物で薬を服用してはいけない

前回は「炭酸水で薬を飲むのは問題無い」という話をしました。ただ、ひとつ注意したいのは、炭酸水にも「軟水」と「硬水」の種類があることです。炭酸は問題なくても硬水に含まれるミネラルが薬と相互作用を引き起こすケースがあるので気を付けてください。また、炭酸水＝炭酸飲料(ジュース)ではありません。炭酸飲料の中でも、コーラなどのカフェインを含んだ飲み物で薬を飲むのはやめた方がいいでしょう。もちろん、カフェインを含むコーヒーや紅茶も同様です。少量であれば問題ありませんが、それでもリスクはあります。カフェインと相互作用のある薬は意外と多いのです。身近な薬では「解熱鎮痛剤」の中にカフェインによって効果が強くなるものがあります。効果だけがアップするのならまだよいのですが、副作用も出やすくなってしまいます。逆に、効果が弱まる可能性がある薬としては、「マクロライド系の抗菌薬(抗生剤)」や「狭心症・心不全の治療薬の一部」(ジピリダモールなど)があります。他には、カフェインの代謝が抑制されることで、利尿作用や中枢神経興奮作用といったカフェインの効果を高めてしまう飲み合わせもあります。該当する薬はたくさんありますが、「キノロン系の抗菌薬」、うつ病の薬である「SSRI」、痛風治療薬の「キサンチンオキシターゼ阻害薬」(アロプリノールなど)が挙げられます。

一番身近な飲み物であるといってもいいコーヒーや紅茶は、意外にも薬との飲み合わせ(互いの吸収や作用に影響を及ぼす)が多いのです。薬を飲むときは、カフェインの取りすぎに注意してください。(日刊ゲンダイ(2017.5.31))

Ⅲ 委員会等の動き

◎ 第2回定例理事会(2月9日)

議案

1. 平成28年度広報・消費振興事業について
⇒ 日本家庭用レギュラーコーヒー工業会及び全日本コーヒー商工組合連合会に賛助金各300万円、日本インスタントコーヒー協会に100万円拠出することとなった。
2. 2015年度環境自主行動計画の農林水産省への提出について
⇒ 今回の環境自主行動計画の策定にはAGF(株)、キーコーヒー(株)、UCC コーヒー(株)に加え、新たに小川珈琲(株)が参加された自主行動計画を農林水産省に提出することで承認を得た。
3. 第119回国際コーヒー機関理事会への派遣について
⇒ 横山 敬一会長及び佐伯訓紀参与が参加することとなった。

報告事項

1. 「コーヒーとからだのおいしい話4」原稿案について

2. 2016年全日本コーヒー協会重大ニュース
3. 2016年の日本のコーヒー需給
4. 2016年コーヒー需要動向調査（速報ベース）について
5. 加工食品の原料原産地表示制度に関する検討会中間とりまとめ
6. 食品衛生管理の国際標準化に関する検討会中間とりまとめ
7. JAS法改正について
8. 食品のインターネット販売における情報提供あり方懇談会報告について
9. 食品リサイクル法に基づく食品廃棄物等の不適正な転売の防止の取組強化のための食品関連事業者向けガイドライン
10. FNCよりの「World Coffee Producers Forum」への招請について
11. 平成29年賀詞交換会経費等

◎ 第3回定例理事会（4月11日）

議案

1. コーヒー需要動向調査結果の取扱いについて
⇒ コーヒー需要動向調査委員で検討し整理することとした。
2. 残留農薬検査及び放射線検査結果の取扱いについて
⇒ 希望会員社に配布することとした。
3. HACCP制度に対応したコーヒー製造業の手引書作成に係る安全安心委員会小委員会（仮称）の設置について
⇒ 小委員会を設定し、中小ロースターより3名委員を派遣することとなった。
4. 国際コーヒー機関のInternational Coffee Day等支援について（資料6）
⇒ International Coffee Dayに2万ポンド、コーヒー生産維持のための活動に3万ポンド、計5万ポンドを支援することとした。

報告事項

1. 第119回国際コーヒー機関理事会の概要
2. コロンビア産コーヒー生豆からのクロロピリホス検出について
3. 2017年（1～2月）の日本のコーヒー需給
4. 平成28年度研究助成に係る採択者について
5. 平成28年度通常総会開催場所及び平成30年賀詞交歓会開催について
6. 「コーヒーとからだのおいしい話4」最終稿
7. 全協質問に対するエチオピア国の商標登録に関する回答

◎ 広報・消費振興委員会（2月16日）

1. 「Life with Coffee フォトコンテスト2017」に関する提案について
提案：トータル・コミュニケーションズ株式会社
2. 平成28年度の「10月1日国際コーヒーの日」に関する事業について
 - (1) Life with Coffee フォトコンテスト2017
 - (2) 消費者参加型イベントにできないか
 - ①東京は「Life with Coffee フォトコンテスト2017」と同時に開催
2017年10月1日
 - ②大阪又は神戸
2017年10月1日前が適当でないか

(3) コーヒーと健康に関する啓発番組の提供
ミニ番組を作成し、著作権は全協関係者が自由に使えるような形がどうか

(4) 「Life with Coffee フォトコンテスト 2017」結果の告知
大手新聞全国紙

3. 「コーヒーとからだのおいしい話 4」の制作について
科学情報委員会を中心に掲載記事内容について検討中。現在、顧問ドクターの意見を求めており、3月末上梓ということで進める。

◎ 広報・消費振興委員会（5月18日）

1. 「2017年度広報事業に関する説明」について

説明：トータル・コミュニケーションズ株式会社

2. イベント会場におけるサンプリング及び試飲などについて

(1) 何をサンプリングするか

(2) 試飲用コーヒーはどのようにするか

(3) 試飲時にコーヒーの淹れ方などを実演するか

(4) 全協制作のDVD（ブラジル、コロンビア及びインドネシアのコーヒー生産、コーヒー製品の製造工程など）を放映

⇒ 以上について話し合った。

3. 「コーヒーとからだのおいしい話 4」について

⇒ 顧問ドクター、科学情報委員及び広報消費振興委員のご協力により、5月22日に「コーヒーとからだのおいしい話 4」が納入される。会員各社にも数日後に発送されることを説明。

◎ 安全・安心委員会（3月30日）

1. 2015年24ヶ国コーヒー生豆の残留農薬及びカビ毒検査結果について

⇒ 検査・分析内容をチェックし、理事会の承認を得て、会員へ配布することとした。

2. コロンビア産コーヒー生豆からのクロルピリホス検出について

⇒ 平成27年1月以降、残留農薬違反はコロンビア産コーヒーに限られ、頻度が多いことから検査命令とならないよう注意することとした。なお、現地調査については見合わせる事となった。

3. 2016年8カ国コーヒー生豆の放射能検査結果について

⇒ 検査結果について、理事会の承認を得て、会員へ配布することとした。

4. コーヒー需要動向調査（カフェイン）結果について

⇒ 内部資料として扱うこととしたが、最終結論は理事会に委ねることとなった。

5. HACCP制度に対応した手引書の作成について（資料5～8）

⇒ コーヒー製造工程に知見のある者を委員として手引書を作成することとなった。

◎ 科学情報委員会（3月24日）

顧問ドクターと科学情報専門委員により、平成29年助成研究審査会（全協28年度事業）を開催し、10研究課題を選定した。

◎ 国際委員会（4月25日）

3月のIC0理事会について報告。

◎ 環境委員会（2月2日）

1. 2015年環境自主行動計画について

⇒ 今回調査は1社増え4社となった。委員会で計画内容を検討し、理事会に諮り農林水産省へ提出することとした。

2. 食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律（食品リサイクル法）に基づく食品廃棄物等の不適正な転売の防止の取組強化のための食品関連事業者向けガイドライン

⇒ 廃棄食品について、法に則り適正に処理されるよう注意すべきことを再確認した。

IV 行事のお知らせ

2017年

6月

- 16日（金）研究助成発表会 アルカディア市ヶ谷 14:00～
- 21日（水）需要動向調査報告会（大阪リバーサイドホテル5F-B）13:30～
- 22日（木）需要動向調査報告会（ホテル名古屋ガーデンパレス3F錦）13:30～
- 23日（金）食の安全・安心財団評議員会（JF会議室）12:30～
- 28日（水）容器包装リサイクル協会評議員会（霞山会館37階）13:30～
- 29日（木）安全安心委員会（全協会議室）13:30～

7月

- 3日（月）東日本コーヒー組合地区懇談会（仙台JALシティホテル）
- 4日（火）東日本コーヒー組合地区懇談会（札幌プリンスホテル）

9月

- 28日（木）理事会（全協会議室）13:30～

10月

- 26日（木）理事会（全協会議室）13:30～

11月

- 17日（金）全日本コーヒー協会通常総会（ホテルニューオータニ）15:00～

2018年

1月

- 9日（火）30年新春賀詞交歓会（大阪：ホテル阪急インターナショナル）11:30～
- 11日（木）30年新春賀詞交歓会（東京：帝国ホテル）18:30～

V 人事異動（敬称略）

なし

VI 協会日誌

2017年

1月

- 4日（水）29年新春賀詞交歓会（ホテルオークラ東京）12：30～
- 6日（金）29年新春賀詞交歓会（ホテル阪急インターナショナル）11：30～
- 13日（金）日本フードサービス協会賀詞交歓会（ANAホテル）18：00～
- 17日（火）西日本コーヒー商工組合理事長との意見交換会
- 18日（水）日本食品機械工業会新春賀詞交歓会（パレスホテル東京）16：00～
- 20日（金）「加工食品の原料原産地表示に関する説明会」（合同庁舎4号館）
13：30～
- 23日（月）東日本コーヒー商工組合新年懇談会第一部（東武ホテル）13：30～
第二部（湯本富士屋ホテル）19：00～
- 26日（木）在外公館赴任者との懇談会（農林水産省）18：30～
- 30日（月）HACCP説明会（三田共用会議所）12：30～14：30
全日本コーヒー商工組合連合会新年懇談会（松本楼）17：00～

2月

- 2日（木）パルドFNC東京事務所長の横山会長表敬（全協会議室）11：00～
環境委員会（全協会議室）13：30～
食品関連団体連絡協議会（三会堂ビル）14：00～
- 9日（木）理事会（全協会議室）13：30～
- 16日（木）広報・消費振興委員会（全協会議室）13：30～
- 22日（水）2016年コーヒー需要動向調査プレ報告会（全協会議室）13：30～
- 28日（火）食科協HACCP説明会（日本科学技術連盟）13：30～16：45

3月

- 13日（月）～17日（金）第119回ICO理事会（英国：ロンドン）
- 16日（木）食品健康影響評価（アクリルアミド）説明会（食品安全委員会）13：30～16：00
- 24日（金）研究助成審査会（全協会議室）14：00～
- 29日（水）食の安全・安心財団理事・評議員会（JF会議室）12：30～
- 30日（木）安全・安心委員会（全協会議室）10：30～

4月

- 5日（水）ISIC論文の取り扱いに関する話合い（全協会議室）10：30～
- 11日（火）理事会（全協会議室）13：30～

- 12日(水) 食品関連団体連絡協議会(三会堂ビル) 14:00～
25日(火) 国際委員会(全協会議室) 13:30～
28日(金) 全協研修会(大阪リバーサイドホテル) 13:30～

5月

- 12日(金) 日本フードサービス協会総会後懇親会(帝国ホテル) 18:00～
15日(月) 東日本コーヒー商工組合通常総会(アルカディア市ヶ谷) 15:30～
17日(水) ヴェレスFNC 総裁 横山会長表敬訪問(全協会議室) 11:00～
18日(木) 広報・消費振興委員会(全協会議室) 10:30～
24日(水) 需要動向報告書検討会(全協会議室) 10:00～
25日(木) 全日本コーヒー商工組合連合会通常総会(リーガロイヤルホテル京都) 14:00
31日(水) 需要動向調査報告会(メルパルク東京 3F 牡丹) 13:30～

一般社団法人 全日本コーヒー協会

ALL JAPAN COFFEE ASSOCIATION

〒103-0015 東京都中央区日本橋箱崎町 6-2 マックスビル別館 3階
TEL: 03-5649-8377 FAX: 03-5649-8388

E-mail: ajcaoff@iris.ocn.ne.jp

HP: <http://coffee.ajca.or.jp/>